

「頼政」

諸国を旅する僧（つぎが、京都の寺社を見て回った後、奈良へ行く）とする途中、宇治の里を通りがかります。



そこへ里人と思われる老翁（前シテ）が現れます。

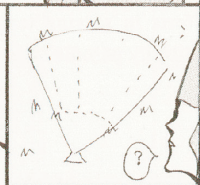


前シテ、老翁



一面は三光針です。

色々と名所を聞くと、老翁は僧を平等院へと導きます。



あれは、何ですか？

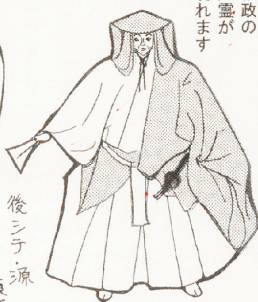
あれは昔、源頼政が自害した場所

今日はその彼の命日、そして私はその頼政の……

そう言い残して消え失せます

その晩、読経する僧のもとに

頼政の幽霊が現れます



後シテ、源頼政



一面は（頼政）この曲りみの専用面です。



頼政は高倉宮に謀反を勧めた時の戦いの激しさを語り、ま倉宮は、死ななて大岡を去馬しました。



平家の船に追われ、宇治橋まで来たさい、頼政は橋の中ほどの板を取り払って、滅れなくしました。



宇治川は大きく、平家方の兵士たちは渡ることが出来ません。



流れの橋にする

田原忠綱という武將が現れ、強い馬を川上に、弱い馬を川下に立て、一騎も流さず、ついに川を渡って、攻めてきました。



川の流れ



味方も半町退いたものの、必死に戦ったのですが、頼政の子、仲綱、兼綱兄弟も討たれてしまいました。

もはやこれまでと思い、平等院の庭の芝の上に扇を敷き、鐘を脱いで座し、一埋木の花咲くこともなかりに身のなるはては、あはれなりけり」と、辞世の歌を残して自害したのでした。



どうぞ跡を引ってくださいと僧に言い残し、頼政の霊は草葉の陰へ消え行くのでした。

